

## 巻頭言

# 聖域は守れるか

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

昨年、国鉄論議が熾<sup>サカ</sup>んなとき、その一角から、「国鉄改革には哲学がない」という奇妙な意見が叫ばれた。赤字20兆円のドロ沼から這いだすための国鉄改革に、哲学があるかないかは、国民の見方、考え方の相違で、一概に哲学がないと断定することは、必ずしも当を得た批判ではなかったと思う。

話かわって、大東亜戦争を哲学的に要約したならば、何ということになるか。それは、当時の軍部、為政者は、余りにも「世界を知らなかった」という一語に尽きよう。然るに、終戦後42年、年間260万人もの日本人が、海外旅行をしている現代に、またしても、わが国に「世界を知らな過ぎる」風潮が蔓延していると嘆くことは、筆者の僻目に過ぎないものだろうか。

本誌10号の巻頭言で、米国産の馬鈴薯の攻勢が始まった。次は米ではないか、と書いたら、何とその原稿が印刷に回わり、誌面とかわった時には、米国製米業者はおろか、米議会での貿易論議となって、米は一大強敵となってしまった。

前農相が渡米して、一応「聖域」論で、ひとまず、沈静化したが、米はその後も絶えず前面に押しだされ、このまま終熄することはないのである。

「米づくり」が、わが国の農業にとって、聖域であることは分かる。問題は、米づくりが

わが国の農業にとって聖域であったとしても、昨年1年の対米黒字827億ドルと公表された現時点では、その不均衡を解消するために、アメリカ側がこのまま放置しておくか、である。

純粹に理屈だけで議論するならば、自動車にしろ、テレビにしろ、製品が安くて、優秀だったから、アメリカ人が買ってくれたわけである。それならば、アメリカの国民生活には大きく寄与したわけである。感謝されこそすれ、憎まれる筋はないわけだが、それが国家間の問題となり、非難され、攻撃の対象とされるのは、その決済が跛行的となり、ドル安となり、アメリカ経済の根幹をゆるがすからである。

政治、経済に門外漢の筆者が口を出す筋ではないが、わが国の農政も、ここで大きく転換する必要があるのではないか。加州米の価格がわが国の米価の六分の一で、しかもおいしいとあっては、従来の助成金、補助金をくれてやり、国家が買上げてまでやるのでは「おんば日笠」の蒲柳児を育てているようなものである。「国が保護してやらないで、誰が保護してくれるか」という論法も分るが、国際競争に打ち勝つ農業を育成することも、現下の緊急事である。

アメリカのこれまでの強引きから見ると、「聖域」をどうして守るか、懸念ではある。